

教養ゼミナールを担当して

増田 拓朗*

1. はじめに

教養ゼミナールを担当した関係で一文を書くことを依頼されたが、恥ずかしながら、教養ゼミナールに関する学術的な論文を書く能力もなければ、準備もしていない。しかし、引き受けた以上は、実施報告くらいは書かなければなるまい（安請け合いをして、結局お茶を濁すという悪い癖はなかなか治らない）。幸い、というべきか不幸にもというべきか、筆者は平成6、7年度と2年間にわたってカリキュラム専門委員会委員、教養教育実施委員会委員を仰せつかり、農学部の教養ゼミナールへの対応をまとめる仕事に関わった。その関係もあって教養ゼミナールの担当も引き受けざるを得なかったという次第である。この間の経緯と教養ゼミナールを担当した感想を書くことでお許し頂こうと思う。

2. 教養ゼミナールに対する農学部の対応

平成6年度入学生に対しては個別科目の中で教養ゼミナールが部分的に開講されていたが、平成7年度入学生に対しては教養ゼミナールを独立した授業科目区分として設定することが、平成5年度のカリキュラム専門委員会において決められていた。筆者は平成6年度からカリキュラム専門委員会のメンバーになったわけだが、前年度の検討結果を引き継ぎ、平成7年度入学生の卒業要件を具体的に決めることから仕事が始まった。委員会開始早々から、教養ゼミナール以外の科目で大難題を抱え、途方に暮れたが、この件は本稿の範囲を超えるので横に置いておく。

平成5年度末までの検討段階で、教育学部は平成7年度入学生に対して教養ゼミナールを必修として課すことを決めていたが、他の3学部はまだ態度を決めていなかった。平成6年度開始早々のカリキュラム専門委員会において、委員長から「少人数、双方向教育が重要であり、教養ゼミナールは高く評価できるので推進するようにとの指摘を文部省から受けている。全学部の参加をお願いしたい」との要請がなされた。ただし、「教養ゼミナールについては、各学部で行うゼミ形式の授業をもってこれに代えることができる」という弾力的な対応が認められており、法学部、経済学部については、それぞれ専門基礎科目の「基礎ゼミナール」、「プロゼミナール」をもって教養ゼミナールに代えることができ、教養ゼミナールへの参加が決定しているものとみなされた。態度未決定は農学部だけとなり、農学部の教養ゼミナールへの参加が強く求められた。

農学部としては、専門に入って専攻分属した学生は（卒業論文を除く卒業要件単位をすべて修得した4年生を含めて）、ほぼ毎日研究室に出てきて卒業研究に取り組み、また、各研究室のゼミナール（単位なし）に参加しており、少人数、双方向教育については十分に実施できているという認識であった。したがって、改めて教養ゼミナールを課す必要はないという考えであったが、

*教授 農学部（緑地環境学）

カリキュラム専門委員会においては、1年次の学生に履修させることが重要であるという意見が強く打ち出された（この時期、教養教育実施委員会の上部委員会である教養教育委員会においても、学長から「教養ゼミナールの必修化と農学部を担当協力」が要請され、かなりの議論が交わされたようである）。農学部を持ち帰り、検討願ったところ、「必要ない」という意見も出されたが、「全学協力体制で教養教育を行うとなっている以上、ゼロ回答は難しい」というカリキュラム専門委員の立場を汲んでもらい、「必修ではなく選択として取り入れる。授業担当の協力については、農学部地区で3クラス開講（各学科1クラス担当）する」という内容で了承が得られた。

この結果をカリキュラム専門委員会に回答したところ、「農学部の学生数に比べて開講クラス数が少ない」、「農学部地区開講では他学部の学生が受講できない」などの批判が出された。とくに法学部が、それまで専門基礎科目で予定していた基礎ゼミナールを廃止し、教養ゼミナール12クラスを担当するという方針を表明し、経済学部もプロゼミナールと同等の位置づけで教養ゼミナールを5クラス担当するという方針を表明したことで、農学部の非協力的な姿勢（とは筆者は思わなかったが、他学部の多くの委員にはそう受け取られたようである）が際立ってしまったことには参った。しかし、当初から、各学部がそれぞれの学生数に応じて担当協力するという位置づけではなかったはずであり、農学部への一般教育教官の配置換ゼロという状況の下で、農学部も前向きな姿勢を示していることを理解してほしい旨、主張した。委員長から、「農学部からも一定の協力が得られたことで、一応、全学参加、全学協力体制が整ったとみなされる」との見解が表明され、この体制で動き出すこととなった。委員長も落とし所と思われたのであろう。この時点で、さらなる追加負担を農学部にとって帰るつもりはなかったが（もし、持ち帰ったとしても、農学部教授会の同意を得ることは難しく、感情的なしこりが増幅しただけだと思う）、委員長の判断には助けられた。

さて、農学部開講のクラスについては、各学科に1クラスずつ担当してもらおうこととし、担当者の選出を依頼した。筆者の属する農業生産学科では、専門教育とくに専門の実験の担当（時間割）との関係から、3名で分担することとし、筆者もその一端を担うことになったが（他学科は1名の教官が担当）、この3名分担についても、当時の教養ゼミナール部会長から、3名で分担するとは何事かというお叱りを受けた。しかし、時間割上、農業生産学科においては1名の教官で担当することが困難である事情を説明し、また、他学部の委員からも、複数の教官が分担することでのメリットもあり、1名で担当しなければならないことはないだろうという理解ある発言を頂き、3名分担案が了承された。この援護射撃も有り難かった。

3. 教養ゼミナールの担当と受講生の反応

農業生産学科開講クラスについては、五井、山内、増田の3名が分担して担当することになり、3名で協議し、「生物と環境」というテーマで各教官の専門性に応じて、植物、動物、環境についてゼミナールを行うことにした。受講生は、農学部22名（農業生産学科17名、生物資源科学科5名）、法学部1名、経済学部1名の計24名であった。初めての経験であり、学生の反応がどのようなものか、正直なところ一抹の不安もあったので、最終日にアンケートをとったところ、多くの学生が興味を持って参加してくれたようで胸をなで下ろした。

3人で分担したことについては、「いろいろな分野の話が開けて興味深かった」、「退屈しなかつ

た」などという肯定的な回答が24名中22名、「ひとつのテーマについてもっと深く聞きたかった」という回答が2名であった。どのような方法であれ、全員に満足してもらうことは不可能であろう。不満が出るのはやむを得ない。むしろ、予想以上に肯定的な回答が多かったことは評価できるのではないだろうか。当初、3人で分担することへの批判もあり、筆者自身も確信を持っていたわけではないが、「農学といってもいろいろな分野があることがわかった。自分が本当に研究したいことを早く見つけて、卒業するまでに自信もてる分野をつくりたい」、「時間が限られていたので、興味のあることを少なざる程度であったのは惜しかった。しかし、これからの自分の進路を考えると、いくつかの分野の端をかじれたことはよかった」などと受けとめてもらったことは、農学部1年生に対する教養ゼミナールとしては大成功といってよいだろう。

問題は、他学部の学生の反応である。「農学部の学生は本部地区の授業を受けている。3、4年次の専門で忙しい学生もサークル活動に通っている。他学部の学生が本部地区の授業のない水曜日の午後に農学部地区開講の授業を受けることに何の不都合もないはずだ」と大見得を切って、農学部地区開講を主張し、押し通した者としてはとくに気にかかっていた点である。しかし、それは杞憂であった。法学部の学生は「ただ、この教養ゼミのために農学部の校舎まで来ている自分にひたすら感動しました。人体、植物、環境と全くつながりはなかったけれど、それぞれに興味深いことがいくつかあったので、取れてよかったです」と書いてくれ、経済学部の学生は「わざわざこの時間のために30分かけてやってきたかいたがよかったと思う。……人間の体の構造の驚くべき不思議さを知り、人間でも思いつかないような植物の知恵を知り、人間が起こしている環境問題を知って、こんなに神秘に満ちた地球上の生き物の一方が加害者となり、一方が被害者となっていることを残念に思った。できれば、こういった授業を小学生の段階から取り入れて、なるべく早く問題点を知った上で、これからの地球を担う世代の人たちが少しでも快適に暮らせるようになってほしいと思う」と書いてくれた。少々尻こそばゆい感じもするが、本部地区の学生が欠席もせず毎回出席し、このように総括してもらえれば、担当者としては言うことはない。

また、授業に際しては、一方通行的な知識教授型の授業ではなく、学生一人一人に考えてもらい、意見や質問を出してもらうように努め、授業が単調にならないようにビデオやスライドも用いた。講義一辺倒の授業が並ぶ中で、教養ゼミナールは学生にとってオアシスであったかも知れない。「ビデオやスライドがあって興味深く聞けた」、「正解を出すのではなく、自分の意見を堂々といえたのがよかった」、「先生やクラスの他の人のいろいろな意見を聞いてよかった」、さらには「もっとディスカッションしたかった」という回答が返ってきた。学生に迎合することがよいとは思わないが、大学進学率が高くなり、ある意味では大学の高校化が進行している現在（専門性で学部、学科を選んで入学してくる学生がどれほどいるだろうか）、「先生方は、大学における学問は自ら進んでやるものだ、やる気のないものは去れというけれども、勉学意欲を削ぐような授業も多い。もっと学生が興味をもてるように考えてほしい」という声も聞く必要があるだろう。勿論、これは筆者が行っている専門の授業にもいえることである。しかし、専門の授業はどうしても知識教授型、一方通行にならざるを得ない。頭を痛めているところである。

4. おわりに

現在の教養教育のあり方（授業科目の構成、卒業要件、授業担当等）については、いろいろと疑問を持っている。それらを逐一展開することは本稿の目的ではないが、本稿を閉じるにあたって、一言書いておきたい。

大学院教育の比重がますます大きくなってきており、また、教官自身が研究業績を挙げることで求められている状況下で、専門学部の教官が教養教育を担当することは大きな負担である。とくに農学部の教官が本部地区開講の授業を担当することには大きな時間的制約がある（このことについてはカリキュラム専門委員会、教養教育実施委員会を通して何回も発言してきたが、本部地区の教官にはなかなか理解して頂けないようである）。今回われわれが担当した教養ゼミナールについては、農学部地区開講、3人で分担ということで教官の負担は比較的軽く済み、かつ授業目的も達成できたのではないかと考えている（自画自賛だとお叱りを受けるかも知れないが）。教養教育への農学部教官の担当協力を容易にするためには、農学部地区開講を増やして頂く必要がある（実際、平成8年度開講分については農学部地区開講の教養ゼミナールを1クラス追加し、4クラス開講することにしたが、本部地区開講ということであれば農学部教授会で了承を得るのは難しかったと思う）。一般教育教官の配置換が行われ、農学部の担当コマ数がさらに増えた場合には、そうしなければ動かせないであろう。

全学協力の下での教養教育ということを考えるとき、キャンパス問題は非常に大きい。分離キャンパスは、教官にとっても学生にとっても、また事務官にとっても大きな障害である。創造システム工学部創設の見通しもかなり明るいようだが、そのキャンパスがどこになるのか未だ明かではない。3極分散はあり得ないと聞いているが、実際どうなるのか。4年一貫教育、高学年での教養教育科目の履修、あるいは学部間での授業協力（開講科目の相互乗り入れ）といったことを考えても、全学統一キャンパスが望ましい。しかし、全学統一キャンパスは遠い先の夢物語でしかないようである（六単組委員として学長会見でも質問したが、前向きな回答は頂けなかった）。分離キャンパスでいかざるを得ないのであれば、「全学協力の下での教養教育」の意味とその実施体制を再検討する必要があるのではないか。この2年間、教養教育の実施に関わって最も強く感じていることである。